

## 『マイ・アントニア』における両立する太陽と月の象徴性

飯島 昭典

## はじめに

いつまでも消えない一人の少女の思い出、過去から繋がる現在。40代半ばに差し掛かった男性が語る一人の女性の思い出はロマンティックな個人的告白としてのみ多くの読者を獲得してきたのだろうか。ウィラ・キャザー(Willa Cather, 1873-1947)という女性作家が紡ぐジム・バーデン(Jim Burden)という男性の語りはそれ以上の何かを我々に伝えているがゆえに、多くの『マイ・アントニア』(*My Ántonia*, 1918)<sup>1</sup>愛読者のみならず、途切れる事のない研究を現在に至るまで生んでいるのである。

『マイ・アントニア』はジムという現在は弁護士として成功はしているが、満たされない結婚生活を送っている男性が<sup>2</sup>アントニア(Ántonia)の思い出を友人と共有するために書き記したもの、という形式を取っている。ジムが過去の思い出として書き記すという形式は、彼の想像力の産物であると言える。マリリー・ランドマン(Marilee Lindemann)はこの事を端的に「アントニアは言葉で作られた人物である。彼女はキャザーとジムがアイオワを列車で一緒に通過する時に用いる会話の中に初めて現れる。そして次にジムが彼女の思い出を書き記す事の中に現れる」(“Ántonia is a figure made of words. She emerges first in the “talk” “Cather” and Jim engage in while crossing Iowa together on a train, and then in Jim’s “writing down” his memories of her”)(115)と説明している。つまり言葉としての存在のアントニアは、言葉によって意味を与えられる象徴性とも近い存在なのである。アントニアを語るこの作品は、象徴の物語として解釈する事が許されるのである。

作品中に現れる様々な象徴的場面において最も美しく強い印象を与えるのは第4部の最終場面である次の箇所ではないだろうか。

As we walked homeward across the fields, the sun dropped and lay like a great golden globe in the low west. While it hung there, the moon rose in the east, as big as cart-wheel, pale silver and streaked with rose colour, thin as a bubble or a ghost-moon. For five, perhaps ten minutes, the two luminaries confronted each other across the level land, resting on opposite edges of the world. (206)

畑を越えて家の方に向かって行った時、太陽は沈み、大きな金色の球体が西の空に掛かっていた。それと同時に東の空には月が昇ってきた。車輪のように大きく淡い銀色にバラの縞模様があり、シャボン玉か幻の月のように淡い色だった。5分かおそらく10分ぐらい二つの発光体は平らな大地を挟み、世界の反対側に位置を取っていた。

ジムとアントニアが別れる場面のこの自然描写は、作品全体のテーマとも関わってくる重要な場面としてここでは仮定するものである。太陽と月という昼をつかさどる物と夜をつかさどる物の二つの存在の両立は、本来なら相反する物の並置であり、一日のうちでこの現象が見られるのは一瞬の事であろう。本稿で明らかにするのは、太陽と月が両立するこの場面の象徴性を明らかにする事である。

この目的を達成するために本稿の第1節ではジムとアントニアにおけるそれぞれの境界を説明する。第2節では実際に結婚する事のなかったジムとアントニアの二人の愛は成立しえたのか、という問いに答えを出す。この2点を明らかにした時、本稿の論題である先に引用した象徴的場面の意味は一体何であるか、という事が明らかにされるのである。この場面は一体どんな意味を持っているのであろうか。

## 1. ジムとアントニア二つの境界

この作品のタイトルは『マイ・アントニア』であり、「私」と「アントニア」の二つの要素が示されている。ジムははじめ、この物語を『アントニア』と名付けようとしたが、あえて『マイ・アントニア』と訂正を行った事がイントロダクションの中で説明されているのである(2)。ジム自身の存在とアントニア自身の存在がこのタイトルで強調される事になったのである。この二重性に関して、批評家ジョン・スウィフト(John Swift)は『マイ・アントニア』について「二重性はいつもキャザーの思考の中に存在し、後の作品の中で強制的に知られるようにしたのだ。そこでは旅行者という人物を彼女は度々直接的に作り上げたのだ」(“ a dualism was always present in Cather’s thinking, and it made itself known forcefully in her later work, where she frequently directly invoked the figure of the tourist ”)(307)と説明しているし、また別の批評家マイルズ・オーベル(Miles Orvell)は、「作品が終わりつつある中で、我々は二人のキャラクターの間のはっきりしたコントラストを経験する事になる」(“ as the book concludes, we experience a deepened contrast between the two characters ”)(49)と異質の二つの境界という範囲の二重性に注目している。

ジムとアントニアは確かに異なる別の境界に身を置いている登場人物なのである。この事は作品の冒頭から既に表現されている事である。列車で同じ目的地へと向かうジムとアントニアは、ジムの一行は普通客車であり、アントニアの家族は移民専用の車両というカテゴリー分けがなされているのである。貧しさが支配的なアントニアの家族とは違い、ジムが経験する列車の中での待遇は以下のようなものである。

Jake bought everything the newsboy offered him: candy, oranges,

brass collar buttons, a watch-charm, and for me a *Life of Jesse James*, which I remember as one of the most satisfactory books I have ever read. Beyond Chicago we were under protection of a friendly passenger conductor, who knew all about the country to which we were going and gave us deal of advice in exchange for our confidence. (5-6)

ジェイクは車内販売の売り子が差し出すものは何でも買った。キャンディ、オレンジ、真鍮の襟止め、時計のチャーム、そして『ジェシー・ジェームズの生涯』を僕に。この本はこれまで読んだものの中で一番気に入った本の一冊として覚えている。シカゴから先では親切な車掌が面倒を見てくれた。この人は僕たちがこれから行く地方の事をよく知っていて、僕たちの信頼に応じて色々助言をしてくれた。

買える物は何でも買い、そして列車の従業員からも優遇されるという裕福さと恵まれた立場が表されているのではないだろうか。移民専用の車両へと差別されるアントニア一家とは全く違う境遇である。既に作品冒頭で異なるカテゴリーに身を置いているジムとアントニアなのである。

そしてジムとアントニア自身にとっても置かれた立場の違いが、演じる役割の違いを生んでいるのである。英語を自由に話せないアントニアにジムは「青、青い空」(“blue; blue sky”)(19)と言葉を教える場面がある。そして瞬く間に「彼女は20ほどの言葉を覚えた」(“she learned a score of words”)(19)のである。これは教師と生徒という関係であり、二人の異質性を表すエピソードである。アントニアの父シメルダ(Shimerda)も「教えてください、私のアントニアに教えてください」(“Te-e-ach, Te-e-ach my Án-tonia!”)(20)とジムとアントニアに対して教師と生徒という関係性を望むのである。<sup>3</sup>アントニアがジムに対して敬意

を持つようになる事が作品中で表されているが、作品の第1部から指導的立場にいるジムと教えを受けるアントニアという境界の違いという二重性が明らかになっているのである。

ジムとアントニアが演じる役割の差異に決定的な要素となるのは、都会という文明の働きである。スウィフトはジムもアントニアも都会という文明の影響を受けるが、「それぞれが、個人と文明は自分たちの本質的な起源をあいまいにしまう事で、最終的に脅かされてしまうものとしても見ていた」(“each also saw individuals and civilization as finally threatened by the obscuring of their own vital origins”)(226)と説明し、ジムとアントニア双方が彼らの起源である農場を否定しない条件のもとに都会からの影響があるとしている。確かにジムはアントニアと過ごした農場での日々を否定せずに、懐かしいものとしてこの物語を綴っているのであり、その意味で彼は自己の起源を否定しているとは言えないであろう。

しかし、ジムとアントニアの意識の問題ではなく、都会の実際的影響とはどんなものなのだろうか。ジムはアントニアと過ごした農場からブラックホークという町、そしてリンカーンというさらに大きい都会、そして今はニューヨークという大都会で弁護士として活躍しているのである。ジムにとって都会から都会への移動は教育の環境とも重なり、直線的な移動であるという事ができる。彼の社会的成功は、都会において可能だったのであり、意識の面では別としても、農場という小さな環境を否定する事によってもたらされたものなのである。対するアントニアは、農場からブラックホークという都会への移動はあるものの、最後には農場に戻るという回帰の軌道をとっている。ここでアントニアにもたらしたブラックホークという都会の文明の働きについて考察してみる事にする。ジムに町などには行かなかった方が良かったのだね、と尋ねられるアントニアは以下のような返答をする。

“ Oh, I’m glad I went! I’d never have known anything about cooking or housekeeping if I hadn’t. I learned nice ways at the Harlings’, and I’ve been able to bring my children up so much better. Don’t you think they are pretty well-behaved for country children? If it hadn’t been for what Mrs. Harling taught me, I expect I’d have brought them up like wild rabbits. No, I’m glad I had a chance to learn; . . . (221)

「ああ、私は行った事は良かったと思っているのよ。もし町に出なかったら料理も家事も何も分らないで終わってたのだから。ハーリング家でちゃんとしたやり方を身につけたのよ。だから子供たちをきちんと育てる事が出来たんです。田舎の子供にしては行儀がいいでしょう？ハーリングの奥さんから教えられた事がなかったら、私は子供たちを野ウサギみたいに育てたんじゃないかしら。私は学ぶ機会があったのを良かったと思っているわ」……

アントニアにとって都会という文明がもたらしたものは、子供たちの教育という家庭にとって有益な知識である。農場に戻るという空間的な回帰のみならず、父シメルダを失う前の幸せな家庭生活に戻るという精神的な回帰とも考えられるのである。知識を得ながら都会から都会へと直線的に移動しながら、行き着いた先が不毛な結婚生活というジムとは明らかな対比を示すものではないだろうか。

意識では否定せずとも農場という環境を捨て去る事で社会的な成功を手に入れたジム、そして行き着いた先の不毛な結婚という結果。そして都会で得た知識を農場での子育てに役立てるといふ、自らの起源である農場を捨て去らずに回帰したアントニア。そして幸せな結婚を手に入れたアントニア。ジムとアン

トニアは彼らの人生の直線性と回帰、不毛な結婚と幸せな結婚という異質の二つのカテゴリーに分ける事が出来るのである。ジムとアントニアは、作品冒頭の列車での移動のカテゴリーの違いに示された通り、異質の境界を生きる事になったのである。

## 2. ジムとアントニアの愛は成立しえたのか

この物語はジムとアントニアを主軸にした物語であり、男性と女性である彼らの関係性に注目がいくのは当然の事と思われる。『マイ・アントニア』を翻訳した佐藤 宏子も「多くの批評家や読者から、ジムとアントニアがなぜ結婚しないのかという疑問が出されている」(315)と述べているし、作品分析を行っている筆者にとっても彼らの関係性は最大の関心事であるように思える。ここでは結果的に結婚する事のなかったジムとアントニアに対して、彼らの間の愛は成立しえたのか、という疑問を投げかけたいと思う。

移民であるアントニア一家に対しては様々な偏見が存在している。アントニアとの出会いの場面と言っていい列車の中で、アントニアの紹介を受けたジムであるが、彼は恥ずかしさから持っている本を読み続けるという行動を取る。<sup>4</sup> それに対して一緒にいたジェイクが取った行動は何であろうか。「ジェイクはそれでいいんだと言うようにうなずき、外国人から悪い病気がうつるかもしれないからね、と言った」(“ Jake nodded at me approvingly and said you were likely to get diseases from foreigners ”)(6)のである。アントニアたちを病原菌とみなすジェイクの偏見である。この事はジェイクだけの感情ではなく、他の者たちも偏見という感情を持っている事が作品中で示されているのである。オーストリア人であるフックス(Fuchs)は、アントニアたちがプレーリードックを食べる事はそれが食用としては問題ない、しかし同じネズミの仲間として共食いになる



から問題である、というような差別を行っているのである(47)。<sup>5</sup>

ジムはこうした偏見を壊す役割を演じている、と言えるであろう。アントニア一家への手助けのお礼にもらった贈り物に対してジムの祖母は、「変な動物の干し肉かもしれないよ、ジム。干し魚ではないし、茎やつるになったものではない。気味が悪いよ」(“They might be dried meat from some queer beast, Jim. They ain’t dried fish, and they never grew on stalk or vine. I’m afraid of’em.”)(52)とせっかくもらった贈り物をストーブに投げ込んでしまうのである。しかし、ジムだけは、「私は手に持っていたかけらの端を試しに噛んでみた」(“I bit off a corner of one of the chips I held in my hand, and chewed it tentatively.”)(52)という行動を取るのである。この行為は単なる好奇心からの行動としてだけではなく、アントニアと親しく過ごすジムを考えるならば、偏見を持たないジムの行動とも考えられるのである。実際にジムは「私はアントニアが好きだった」(“I liked *Ántonia*”)(30)と述べているのである。

周囲のアントニアたちへの評価とは違い、親密性を増していくジムとアントニアは、確かに恋人としての会話とも考えられる場面を演じている。ここでは数ある場面の中から次の箇所を引用してみる事にする。

You’re not going to sit around here and whittle store-boxes and tell stories all your life. You are going away to school and make something of yourself. I’m just awful proud of you. You won’t go and get mixed up with the Swedes, will you?”

“I don’t care anything about any of them but you,” I said. “And you’ll always treat me like a kid, I suppose.”

She laughed and threw her arms around me. . . . (143)

「あなたはこの町にとどまって荷箱を削ったり、噂話をして一生を過ごす人ではないのよ。ここを出て学校に行って世の中で成功するの。私はあなたのことを誇りに思っているのよ。スウェーデン人となんか関わりを持たないでね」

「僕にとって大切なのは君だけなんだ」と僕は言った。「それなのに君はいつも子供扱いをするだろう」

彼女は笑って僕の体に腕を廻した。……

ジムに対しての尊敬は愛情を含むものと言えるであろう。そしてジム自身も愛の告白とも考えられる答えをしている。アントニアはジムによる子供扱いをするという非難に対して、体に腕を廻すというスキンシップで応えているのである。続くアントニアの「きっとそうね。でもあなたは私が大好きな子供なのよ。私の事いくら好きになってもいいけれど、もしリーナにあんまりまとわりつく様だったら必ずお祖母さんに言いつけますからね」(“I expect I will, but you’re a kid I’m awful fond of, anyhow. You can like me all you want to, but if I see you hanging round with Lena much, I’ll go to your grandmother, as sure as your name’s Jim Burden!”)(143)という受け答えは恋人たちのする痴話げんかの様子を十分に伝えているのではないだろうか。ジムとアントニアには恋人とも取れるような描写が続くのである。

しかし、ジムとアントニアは実際には恋人には成りえない。彼らの間に愛は成り立たないことが、以下のような事によって証明されるであろう。ジムとアントニアが親密性を増したのは、大きなガラガラ蛇をジムが殺すという行動を取ったからである。この結果、ジムは「今や自分は立派な大人なのだ」(“I was now a big fellow”)(34)と考える事が出来、アントニアからの敬意と自身の男性性を意識する事が出来るようになったのである。ジムの男性性の意識はア

ントニアとの関連で重要な事であると思われる。ジムは決して消極的な男性ではなく、アントニアにキスを迫ったり、ウィック・カッター(Wick Cutter)がアントニアを暴行しようとするのを防ぎ自分で戦ったりと、ジムはアントニアに対して十分に男性性をアピールしているように思える。こうしたジムの行動は少年時代の大蛇殺しが彼に深層心理で自信を与えているのである。大蛇を殺したジムは「彼女はこれ以降、僕をもっと好きになった」(“ She liked me better from that on ”)(34)と強く信じているのである。

ジムに自信を与える事になったガラガラ蛇殺しは、しかし偽りの冒険とも考えられるのである。ジムが殺した大蛇は年老いた蛇であり、「実際、それは偽の冒険だった」(“ in reality it was a mock adventure ”)(34)のである。この大きさの蛇は通常であれば、「どんな少年でも扱いきれない」(“ more than any boy could handle ”)(34)代物だったのである。ジムに自信を与えた大蛇殺しはその性質上、本来の意味での少年から大人の男性へという通過儀礼の役割は果たしていないのである。ジムの考える自らの働きと実際の状態は乖離しているのである。これは理想と現実の乖離とも言えるであろう。

理想と現実の乖離は、ジムの見る夢にも表される。ジムは短いスカートをはいたリーナ・リンガード(Lena Lingard)が「曙のように顔を紅潮させて」(“ flushed like the dawn ”)(144)「みんな行っちゃったわ。だからあなたといくらでもキスが出来る」(“ Now they are all gone, and I can kiss you as much as I like ”)(144)とジムに語りかける夢を何度も見る。セックス・アピールと考えられるこの夢は決して自らが強く思うアントニアについてみる事はなく、いつもリーナだけなのである。「私はこの心躍るような夢をアントニアについてみたかった」(“ I used to wish I could have this flattering dream about Antonia ”)(144)というジムの考える理想はリーナの夢という実際の状態と乖離しているのである。この点についてもジムの考える理想と現実には違いが存在

するのである。アントニアを引き付ける事になった大蛇殺しの虚偽性、繰り返し否定されるアントニアについての夢、これらはジムとアントニアとの愛が成立しえない事の暗示と言えるのではないだろうか。

愛の不成立を示すエピソードとして強烈な印象を残すものは、若い頃に狼に追われたパヴェル(Pavel)とピーター(Peter)が花婿と花嫁を橋から投げ落とし、彼らを犠牲にする事で、自分たちだけが助かったという話であろう。新郎新婦の愛は狼の餌食になるという事で終わりを告げたのである。将来にあるであろう暖かい家庭生活は奪われ、愛は不成立に終わったのである。「アントニアと私にとって、この結婚式の一行の話は決して終わる事がなかった」(“ For *Ántonia and me, the story of the wedding party was never at an end* ”)(41)というように二人にとってこの話は自分たちにとって関連性を与えているのである。この新郎新婦の愛の不成立のエピソードはジムとアントニアに関連性を与えているのである。この事もジムとアントニアの成立しえない愛の暗示であると考えられるのである。

結婚をしていながらもアントニアとの思い出を長々と物語に綴ったジムは過去を見つめる人物である。そして作品中でも20年もたってからアントニアの元を尋ねるジムは未練とも考えられる後ろを向いた男性であると言える。彼は理想にしがみついた人物であるとも言えるのである。対するアントニアはどうか。ラリー・ドノバン(Larry Donovan)との悲劇的な恋愛の後に彼女が選んだ夫は、クザック(Cuzak)という「あまり能力のない男」(“ not an man of much force ”)(211)だが、アントニアとの間に何人もの子供をもうける優しい男である。ロマンティックであるが生活力がなく、アントニアを捨てたドノバンとは全く異なる男性である。アントニアは平凡ではあるが、一緒に家庭生活を送っていく現実的な男を夫としたのである。この事を先にあげたランドマンは「アントニアと夫は互いに献身的であり、よき友人として献身的であった。彼

女たちの関係はアントニアの新しい生活の基盤となったのである」(“*Ántonia and her husband are devoted to one another, as devoted as good friends, and their relationship becomes the foundation for Ántonia’s renewed life*”)(48)と説明している。

男性と女性の間でありながら、友人のような関係はロマンティックな間柄ではないかもしれない。しかし、この間柄によってアントニアは家庭と子供たちの現在、そして未来を見つめる事が出来るのである。「彼女は新しい世界で新しい生活に従事しようと前進している」(“*[She] moves on to engage in a new life*”)(Jones 89)のである。過去を向いているジムとは明らかな対比を示すのではないだろうか。

ここまでジムとアントニアとの間の愛は成立しえたのか、という点について述べてきたが、愛の描写はあるもののそれを否定する暗示が作品中で示されている事、そして過去を見るジムと、現在と未来を見るアントニアは、明らかな差異がある事をここでは示した。以上のような事から、ジムとアントニアの間の愛は成立しえなかったと言えるのではないだろうか。実際問題として結婚しなかった二人であるが、彼らを説明する暗示の描写と性格の違いにより、愛が成立する状況ではないのである。

## まとめ

ティモシー・ブラックバーン(Timothy Blackburn)は、ジムがアントニアを20年ぶりに訪れた時の様子をこのように説明している。「ジムはクザックの農場に正午を少し過ぎたぐらいに到着する。それは影や見間違いがないはっきりと見える典型的な時間帯である」(“*Jim arrives at the Cuzak farm a little past middy, a classic time for seeing clearly without shadows and illusions*”)(145)。

しかし、「正午の明らかさにもかかわらず、ジムはどの農場がアントニアのものであるかはっきりしない」(“ In spite of noon’s clarity, Jim is unsure which is *Ántonia’s*”)(145)のである。久々にアントニアの元を訪ねたジムとアントニアの精神的距離を意味しているのではないだろうか。ジムとアントニアは置かれている立場が全く違うのである。ジムは不幸な結婚生活を送っており、子供はいない。アントニアは幸せな結婚生活を送っており、多くの子供に恵まれている。そして彼らの社会的立場も明らかな差異が存在するのである。久々に農場であったジムによるアントニアの印象をここで引用してみる事にする。

She lent herself in immemorial human attitudes which we recognize by instinct as universal and true. I had not been mistaken. She was battered woman now, not a lovely girl; but still had that something which fires the imagination, could still stop one’s breath for a moment by a look or gesture that somehow revealed the meaning in common things. She had only to stand in the orchard, to put her hand on a little crab tree and look up at the apples, to make you feel the goodness of planting and tending and harvesting at last. All the strong things of her heart came out in her body, that had been so tireless in serving generous emotions. It was no wonder that her sons stood tall and straight. She was a rich mine of life, like the founders of early races. (226-7)

彼女は私たちが本能的に普遍的で真実と認める、太古からの人間の生き方に力を与えている。私は間違っていなかった。彼女は今では美しい娘ではなく、やつれた女性ではある。しかし、彼女は今でも想像力を刺激するものを持っているし、眼差しや身振りでありふれたものに秘められている意

味を明らかにする事で、一瞬人をはっとさせる事が出来るのだ。彼女が果樹園に立ち、小さなクラブアップルの木に手を置いてリンゴを見ただけで木を植えて、世話をし、最後に収穫する事の素晴らしさを感じさせるのである。彼女の心情の力強さは彼女の体に現れ、疲れることなく気高い感情に仕えたのだ。

彼女の息子たちが皆背が高くまっすぐに背筋を伸ばして立っているのは不思議ではない。彼女は太古の種族の始祖のように豊かな生命の泉なのである。

ジムによるアントニアへの賛美の描写である。しかし、これはアントニアが一人の女性ではなく、女性の母性全体を表す女性原理として説明されているのである。ジムとアントニアはそれぞれ別の人間を妻として夫として持っているものであり、恋愛の感情が芽生える可能性は持っていない。しかし、ジムが当初アントニアに感じていた恋人としての感情は、アントニアを女性原理とみなしてしまう事によって、現実味を失ってしまうのである。実際に結婚する事になかった二人であるが、ジムにとってアントニアは非現実性を帯びる事により、精神的な意味でも恋愛感情を持つ状態ではなくなってしまうのである。別の人間と結婚したという事実と共に、ジムはアントニアに対して実際の一人の女性としての感情を持たなくなってしまうという事が出来るのである。

以上ここまで本稿第1節ではジムとアントニアはそれぞれ別の境界を生きる二人であり、ジムの人生は直線性が特徴であり、アントニアの回帰の人生とは明らかな違いがある事を示した。そして第2節ではジムとアントニアとの間の愛は成立しえたのかという仮定のもとに恋愛が成立しえるかもしれない描写はあるものの、愛が成立しない様々な暗示と描写があり、二人の愛は成立しえないという事を説明した。ここで本稿の論題である作品第4部の結末にある空に

同時に浮かぶ太陽と月の象徴性は何かという事に答えを出してみたいと思う。それは沈みかかる太陽がジムを表し、昇り始めた月がアントニアを表しているのではないだろうか。太陽と月が同時に存在するというの一日の内で一瞬の事である。その一瞬は二人が過ごした子供時代を表しているのである。太陽と月が同時に存在する時間、つまりジムとアントニアが共有する時間というのは人生の中で、一瞬の時間である子供時代だけなのである。太陽と月はそれぞれが存在する時間は異なっている。太陽は昼であり、月は夜である。これがジムとアントニアの置かれた立場の違いなのである。社会的成功は収めているが、幸福とはいえない人生を送っているジムはこの場面でこれから沈んでいく太陽とも重なる。反対に社会的な成功はなくとも幸せな家庭生活を送っているアントニアは、これから昇りつつある月を表しているのである。<sup>6</sup>異なる立場の違いが両立できるのはこの第4部の太陽と月が表すように子供時代と言う一瞬の思い出なのである。これが本稿の論題である、太陽と月が表す象徴性は何か、という問いへの答えである。

『マイ・アントニア』には様々な象徴が隠されており、傑作の名が表すように読み返す度に新たな発見がある作品である。作品中で繰り返される死のエピソード、過去と現在の時間の経過を表すエピソード、ここで示した以外の暗示に富む自然描写などである。アメリカで国民的文学として長く読み継がれてきた名作は、これからも多くの発見を提供し続けるであろう。過去を表す作家と言われるキャザーは、研究の上で現在と未来を提供する作家である。上に挙げた本稿で説明しきれなかった象徴性については別の論者の評を期待して筆を止める事にする。



## 註

1. 以下、『マイ・アントニア』からの引用は Willa Cather, *My Antonia*, Ed. Kathleen Norris, Houghton Mifflin Company, 1995 の版による。
2. 主人公の名前 Jim Burden は一種の暗示的メッセージを発している。Burden は“burden”と同じ綴りであり、彼の送っている結婚生活や満たされない日常が「重荷」である事を伝えている。社会的成功とは反対の苦しみを暗示するものとなっているのである。
3. 父シメルダは祖国で楽器を仲間とともに演奏するというような知的生活を送っていた男性である。アントニアへの教育の関心はシメルダ夫人よりも強いものと予想されるのである。シメルダ氏とシメルダ夫人の性格の違いは作品中で随所に見られるものである。
4. このジムの本を読むという行為は、後に彼がアントニアに対して教師的な役割を果たす事や、進学して大学に進み、弁護士として成功するという知的生活を送る事をこの段階で示していると考えられる。知的生活者の暗示的行為である。
5. アントニア一家に対してのみならず、同じ移民であるパヴェルやピーターに対しても人々は偏見を持っている。「このロシア人たちはあまりにも運が悪かったので、人々は彼らを恐れ、彼らの事を考えないようにした」(“ **The Russians had such bad luck that people were afraid of them and liked to put them out of mind**”)(35)というような描写は、移民という異質なものに対する偏見が元になっているのは言うまでもない。異質のもの排除というアメリカの悪習の典型的現象という事が出来るであろう。
6. キリスト教のシンボルの観点からも太陽は男性を表し、月は女性を表すと見える。中世およびルネサンスの時代、「キリストの磔刑」には十字架の両側

に太陽と月が描かれるが、この二つの天体は擬人化され太陽は男の顔、月は女の顔をしている。また太陽の光によって輝く月が旧約聖書、太陽が新約聖書を表すという考えもある。新約聖書という太陽の光によって理解すべき事が旧約聖書に示されていると考えられるのである。

## 引用·参考文献

- Ammons, Elizabeth. “ *My Ántonia* and African art. ” *New Essays on My Ántonia*. Ed. Sharon O’ Brien. New York: Cambridge University Press, 1999. 57-82. Print.
- Blackburn, Timothy. “ “ Have I changed so much? ” Jim Burden, Intertextuality, and the Ending of *My Ántonia*. ” *Cather Studies*. Ed. Guy Reynolds. Lincoln: University of Nebraska Press, 2007. 140-64. Print.
- Cather, Willa. *My Ántonia*. Ed. Kathleen Norris. New York: Houghton Mifflin Company, 1995. Print.
- Gross, Jonathan. “ Recollecting Emotion in Tranquility: Wordsworth and Byron in Cather’s *My Ántonia* and *Lucy Gayheart*. ” *Cather Studies*. Ed. Guy Reynolds. Lincoln: University of Nebraska Press, 2007. 119-40. Print.
- Jones, Anne Goodwyn. “ Displacing Dixie: The Southern Subtext in *My Ántonia*. ” *New Essays on My Ántonia*. Ed. Sharon O’ Brien. New York: Cambridge University Press, 1999. 85-109. Print.
- Lindemann, Marilee. “ “ It Ain’t My Prairie ”: Gender, Power, and Narrative in *My Ántonia*. ” *New Essays on My Ántonia*. Ed. Sharon O’ Brien. New York: Cambridge University Press, 1999. 111-33. Print.
- Orvell, Miles. “ Time, Change, and the Burden of Revision in *My Ántonia*. ” *New Essays on My Ántonia*. Ed. Sharon O’ Brien. New York: Cambridge University Press, 1999. 31-55. Print.

- Skaggs, Merrill. “Icons and Willa Cather.” *Cather Studies*. Ed. Guy Reynolds. Lincoln: University of Nebraska Press, 2007. 288-303. Print.
- Swift, John. “Cather, Freudianism, and Freud.” *Cather Studies*. Ed. Guy Reynolds. Lincoln: University of Nebraska Press, 2007. 212-29. Print.
- — —. “Willa Cather in Space: Exile, Vagrancy, and Knowing.” *Willa Cather: A Writer's Worlds*. Ed. John J. Murphy. Lincoln: University of Nebraska Press, 2010. 297-311. Print.
- 佐藤 宏子訳. 「解説」『マイ・アントニア』東京:みすず書房, 2011年. 306-16. Print.